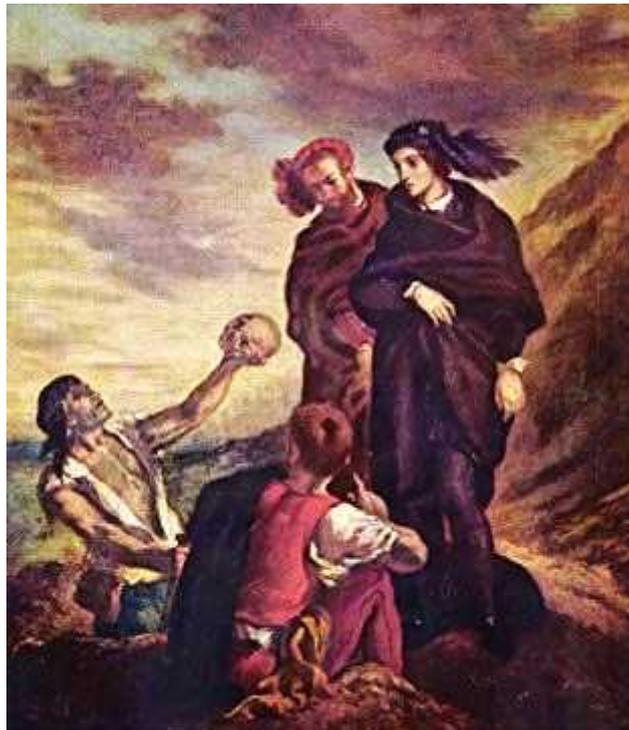


# ハムレットとドン・キホーテ

## 懐疑主義者と汚れなき純粋な人

2022/03/12



ドン・キホーテは、よく、ハムレットと比べられます。知的で紳士で皇太子のハムレットに対して、滑稽で気まぐれで放浪の貧乏騎士であるドン・キホーテという具合にです。どうも、どこでも、ドン・キホーテの方が分が悪いのです。そのことについて、ロシアの文豪イワン・セルゲーエヴィチ・ツルゲーネフ（1818-1883）は、この二人を同等に評する講演をしました。それは、1860年1月10日の「困窮文士学者救済協会」主催公開講演会での講演です。なんとまあ、素晴らしい主催者ではありませんか。名古屋にも欲しいものです。（笑い）

諸君、シェイクスピアの悲劇『ハムレット』の初版とセルバンテスの『ドン・キホーテ』の第一部とは17世紀の初頭に全く同じ年に出ました。この偶然の一致は我々に意義深きものと思われます。

いま申しました二つの作品の互に近いことは我々に色々と感想を起させます。私は暫らく諸君と共にそれらの思想を領(りょう:共有する)させて頂きたいと思います。否、むしろ諸君の御清聴を煩(わづら)わしたいのです。

最初にツルゲーネフが指摘したことは、すなわち、ハムレットとドン・キホーテは、「同時代人である」ということです。ハムレットがいたデンマークも、ドン・キホーテがいたスペインも、同じように文化が栄えた文明国家でした。二人を取り巻く文化的環境も、おなじだということです。ただ、ハムレットはドイツのヴィテンベルク大学で学んだインテリであり、帝王学を学んだ高位高い若い皇子です。一方、ドン・キホーテは、本名をアロンソ・キハーンというラ・マンチャの村に住む 50 歳ほどの老いた貧乏な郷士で、日々、騎士道物語を読んで暮らしていますが、ほとんど読み書きができません。ハムレットは多分日記をつけております。

ドン・キホーテは、あれほど物を知らないにも拘らず、政治の事柄や行政についてははっきりした考えを持っています。ハムレットにはこれらの事を構っている暇もありませんし必要も感じていないのです。

学歴や教養はないものの、「ドン・キホーテは、油断のならない人物だ」と、ツルゲーネフは言っているのです。

『ハムレット』について今まで書かれた注釈は何となくさんございましょう。これから先き現われるだろうと思われるものも何となくさんあるでしょう。この真に汲みつくせないタイプについての研究はどういう様々な結論に導いたでしょう。『ドン・キホーテ』はその課題の性質そのもののため、また南国の輝く太陽にも比すべき真に豪華な物語の明るさのため、『ハムレット』ほどは解説を促(うなが)していないのであります。

このロシア人の「ハムレット鼻根(ひいき)、ドン・キホーテ敬遠」の状況は、日本でも同じです。ハムレットの方が、俄然、人気があります。

しかし遺憾ながら我々ロシア人は『ドン・キホーテ』のいい翻訳を持っておりません。我々の大部分はドン・キホーテについてかなり不当な記憶を懐いていました。『ドン・キホーテ』という言葉を開きますと、我々はしばしば単に道化者のことを考えます。「ドン・キホーテ流」という言葉は我国では愚鈍という言葉と同じ意味であります。時にはドンキホーテ流のうちに我々は自己犠牲という高い原理を認めなければなりません、その場合も喜劇的な側面から捉えられたものに止まります。『ドン・キホーテ』のいい翻訳が出ていたならば、それは読者にとって本当の功績となりましょう。そうして、一般の人々の感謝の念が、この独特な作品にその美しさを発揮させて我々に伝えてくれる翻訳者を待ちうけているのであります。

ロシアでも、『ハムレット』は良い翻訳でよく読まれているが、『ドン・キホーテ』にはそれがないので、誤解や浅薄な理解が生まれます。実際は、その点、私たち日本人は、会田由という名翻訳家と見識ある筑摩書房という出版社を得て幸せです。でも、17世紀の異国の古典であり長編でもあるので、広く、深く、親しく、まるごと読まれているかといえば、ロシアと同じ貧し

い状況かも知れません。

しかしここで私のお話の事柄に戻りましょう。私は申しました。『ドン・キホーテ』と『ハムレット』が時を同じくして現われたことは意義探きものと思われると申しました。私には、この二つのタイプの中に人間の本性の根本的なしなかも相反する二つの特質が具現されているように思われます。人間の本性がそれをめぐって回転する同じ軸の両端なのであります。私には、あらゆる人間が程度の差こそあれ、これら二つのタイプのいずれかに属し、我々の殆ど一人一人が或いはドン・キホーテの方に或いはハムレットの方に外れているように思われます。成程現代に於てはハムレットの方がドン・キホーテよりも甚しく多数になりましたが、しかしドン・キホーテも死に絶えているわけではございません。

ハムレットは時によっては陰険であり残酷でさえあります。王のところからイギリスへ遣(つか)わされた二人の廷臣に対してハムレットが計画した殺害を思い出して下さい。自分が殺したポローニアスに関するハムレットの台詞を思い出して下さい。いずれにしても、私はそこに、前に申しましたつい近頃まで眼の前にちらちらしていた中世というものの反映を見るのであります。別の面から見ますと、誠意のある真実なドン・キホーテの中にわれわれは、半ば意識的な半ば無邪気な嘆き、自己に対する誘惑に陥る傾向 — 感激家の空想に殆ど常に独特なものとなっている傾向を観察せざるを得ません。ドン・キホーテが「モンテシーノスの洞窟」で見た事についての物語は、明らかにドン・キホーテの拵(こしら)え事で、狡猾(こうかつ)な愚人サンチョパンサはそれには誑(たぶらか)されませんでした。

さあ、ツルゲーネフは、具体的なドン・キホーテを物語るのに、「モンテシーノスの洞窟の話」を選びました。[全集版:後篇第23章430頁]

この洞窟の物語は、冒険家のドン・キホーテが、身体に長い縄を結びつけて話題の洞窟の探検に一人降りていった体験談なのです。ドン・キホーテは、地底におりる途中の洞穴で一休みしている間に眠くなって寝てしまいました。そのとき、洞窟の主のモンテシーノスが現れてドン・キホーテを起こして洞窟の奥にある水晶宮へと連れて行きます。そこでドン・キホーテは世にも不思議な体験をします。心配になったサンチョたちが縄を引っ張ってドン・キホーテを地上に連れ戻します。ドン・キホーテは、引き上げられても寝たままでした。やっとのことで正気づいたドン・キホーテは、そのときに経験したことを語り出します。でも、実はこの話はドン・キホーテのでっち上げで、「感激家の空想」の産物でした。そのことをツルゲーネフは言っているのです。でも、それ以上はここでは触れません。

ドン・キホーテは何を現わすものでしょう。私はドン・キホーテを見るのに、表面や些末な点に止まるような慌ただしい見方をしないのです。私はドン・キホーテのうちに悲しい姿をした一個の英雄、旧式な英雄小説をあざけるために創作した人物だけを見ようとはし

ません。勿論この人物の意義はその不滅な作者の独特な手の下で発展し、第二部(後篇)のドン・キホーテ即ち公爵家の男女の愛すべき伴侶、従者をしている将来の知事に封する賢明な教師は、第一部(前編)の殊に初めに出ているドン・キホーテ、したたか拳骨の雨を浴びる一風変わった笑うべき変人ではなくなっています。しかしその故にこそ私はこの本質にまで突き入ろうと努めるのです。

繰り返して言いましょう。ドンキホーテは何を表わすものでしょう。何よりも先に私は信じます。何か永遠な不動なものを、一口に言うと、真理を信じます。真理は個々の人間の外に存し、容易には人間に引渡されず、奉仕と犠牲を要求しますが、しかし奉仕の持続と犠牲の力には[真理は]獲得されるものであります。ドン・キホーテは全心、理想に封する献身に貫かれていて、その理想のためにはありとあらゆる窮乏に身をさらし、生命を犠牲にする覚悟であり、自分自身の生命にも、それが理想の具現、地上に於ける真理や正義の実現に対する手段となる程度しか価値を認めておりません。



Ivan Sergeevich Turgenev 1818–1883

ツルゲーネフは、大変な誉めようです。ドン・キホーテこそ、地上における理想と真理と正義の実現者だというのは。あの、道化者で、愚鈍で、笑うべき変人のドン・キホーテが、です。

人は私に言うかも知れませんが、その理想は病的な想像力によって武士道小説の空想世界から酌み取られたものであると。正にその通りです。且つこの点にドン・キホーテの喜劇的な側面が出ています。しかし理想そのものは、その汚されない純粋性を完全に保っております。自分自身のために生活し、自分の事ばかり気に掛けるということを、ドン・キホーテは恥としたでありましょう。ドン・キホー

テは全心（こう云っていいとすれば）、自分の外に、他の人々のために、自分の兄弟たちのために、悪の絶滅のために、人類に有害なもろもろの力 — 魔法使、巨人 — 即ち迫害者に封する反抗のために生きています。

この人の中にはエゴイズムの痕跡ありません。この人は自分のこと気に掛けません。この人は全心自己犠牲であります。 — この言葉の意義をよく考えて下さい。 — この人は信じています。強く、「左顧右眄」（さこうべん:右を見たり左を見たり、あたりの情勢をうかがってばかりいて決断しないこと）することなく信じています。それでこそこの人は恐れを知らず、我慢強く、極めて粗末な食物や極めて貧しい着物に満足しています。そんなものはどうでもいいのです。胸は平静であり、心は偉大で果敢であります。そのほろりとさせる敬虔の念はこの人の自由を妨げません。

名誉心などは夢にも知らず、しかも自分自身というもの、自分の使命というもの、否自分の肉体的な力というものに疑いを持たないのであります。その意志は不屈不撓（ふくつふとう）の意志であります。同一の目的に封する不断の努力は、或る意味で、その思想に一様性、その精細に一面性をもたらしました。少ししか物を知りません。否、多く知ることを必要としないのであります。ただ自分の仕事は何であるか、何のために地上に生きているかということを知っています。しかもこれは重要な知識であります。

ドン・キホーテはことによると完全な愚か者と見えるかも知れません。なぜかと云うと、全く疑うべからざる現実がその目の前で消え失せ、その感激の火のために蠟のごとく融けてしまうからです。

また、ことによると低能な人と見えるかも知れません。なぜかと云うと、容易に同感することも容易に楽しむことも知らないからです。

このドン・キホーテ評価は、日本でも同じです。子供向けの絵本やお話では、老いて少々狂ったドン・キホーテの滑稽で不格好な冒険話が人気を得ています。

それはこうです。 — スペインのラ・マンチャのとある村に貧しい暮らしの郷士が住んでいました。騎士道小説が大好きで、昼夜を問わず騎士道小説ばかり読んだあげくに正気を失い、自らをドン・キホーテと名乗って遍歴の騎士となり、家来に近所の農夫サンチョ・パンサを雇って、瘦馬（やせうま）のロシナンテに乗り、世の中の不正を正す騎士道の旅に出ます。途中、沢山の風車を見て、それを邪悪な巨人だと思って全速力で突撃して簡単に跳ね返されまいます。いさめるサンチョに、ドン・キホーテは、「自分を妬む魔法使いが、巨人退治の手柄を奪うため巨人を風車に変えてしまったのだ」と言い張ってなおも旅をつづけるのでした。

途中で、ラクダにまたがった二人のお坊さんと一台の馬車に出会いました。

それを見たドン・キホーテは、「あの二人は姫君をかどわかして馬車で連れ去ろうとしている妖術師に違いない」と思い込み、お坊さんたちをやっつけてしまいます。

また、二人で旅をつづけていると沢山の山羊と羊のいる草原にやってきました。ドン・キホーテは、それを見て、「あそこに黄色の甲冑を着た騎士が見えるだろう。この前方にいる軍隊は種々さまざまな国の軍人から出来ている」というが早いが、ロシナンテに拍車をくれて、槍を小脇にかいこんで稲妻のように斜面を駆け下りました。山羊と羊の群のまっただ中に突き進み、すさまじい勢いで山羊や羊を槍にかけ始めました。驚いた羊飼いたちも待ち主も、止めようとしましたがドン・キホーテは怯(ひる)みません。彼らは、ドン・キホーテ目がけて石投げ紐でこぶし大の石を投げ始めました。哀れな騎士は馬からドウと転げ落ちました。

しかしこの人は、何年経っているかわからない樹のように根を深く地の中に張って、自分の確信を変えることも一つの対象から別の対象へ移ることもできないのであります。その倫理的な本質の強さは（注意して置きますがこの気達じみた遍歴の騎士は世界で最も倫理的な人物であります）、その倫理的な本質の強さは、そのあらゆる判断や言葉に風貌全体に特別の力と偉大さを与えていて、その絶えず陥る喜劇的な屈辱的な立場に関わらないのであります。ドン・キホーテは感激家であり、理想の奉仕者であり、従って理想の輝きを浴びています。

ドン・キホーテは、素晴らしい人物です。一方、ハムレットといえば、逆の人物だとツルゲーネフは言うのです。世間の評価とは、真逆です。

ハムレットには、ドン・キホーテの感激とは正反対のものが流れ出て来ます。ハムレットは快感を以て大袈裟に自分を非難し、絶えず自分を観察し、いつも自分の内部を眺め、自分のあらゆる欠点を細かいところまで承知し、自分自身を軽蔑しています。しかも同時に、この軽蔑によって生活し養われていくのだということもできましよう。自分自身を信じませんが、虚栄心は強いのです。なにを欲しなんのために生きているのかも知らずにいながら、生命には執着します。

勝負ありです。でも、ツルゲーネフは、ハムレットの偉大さも、悲しさも忘れません。文学者であるツルゲーネフは、ハムレットに同情します。

しかし我々はハムレットに対してあまりに厳格になりますまい。ハムレットは悩んでいるのです。そうしてその悩みは、ドン・キホーテの悩みよりも一層苦しく一層激しいのであります。ドン・キホーテを打つのは粗暴な羊飼たち、ドン・キホーテに救われた罪人たちです。ハムレットは自分で自分に傷を負わせます。自分で自分の身をかきむしります。その手にはまた剣が、分析という両刃の剣があります。

ハムレットに同感することは誰でもします。また、それは理解のできることです。ほとんどすべての人は、ハムレットのうちに自分の性質を見出します。しかし繰り返して申しますが、ハムレットを愛するわけにはいきません。ハムレット自身が誰をも愛していないからです。

因みに、ツルゲーネフは、1813年生まれのヴェルディとワーグナーよりも5年若く、フランスの作曲家グノーと同じ1818年に「イヤイヤ」産れました。ワーグナーと同じ年の1883年に亡くなったので世界は、「イチヤヤミ・一夜闇」となりました。

都築正道